対決

笹沢左保

徳間文庫

対決（たいけつ）

© 1985 Saho Sasazawa Printed in Japan

101-38

1985年4月15日 初刷

著者 笹沢左保（ささざわさほ）

発行者 荒井修（あらいおさむ）

東京都港区新橋四―一〇〒一〇五

発行所 株式会社徳間書店

電話（〇三）四三三・六二三一（大代）

振替 東京四―四四三九二番

印刷 凸版印刷株式会社

製本 凸版印刷株式会社

〈編集担当 金城孝吉〉

ISBN4-19-567824-2（乱丁、落丁本はお取りかえいたします）

徳間文庫

対決

笹沢左保

徳間書店

目次

穴　5
妻となって三年　61
女ふたり　97
逆光の像　119
惨劇の海　185
解説　新保博久　219

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

穴

1

喫茶店『十字屋』は、京橋と土橋のちょうど中間にある。地下、一階、二階をぶち抜いた席数八十あまりの、かなり大きな店だった。

営業時間は午前十時から午後八時までだが、客の顔触れは一日に三通り変った。

午前中は学生や前夜外泊して行き場を失ったような青年が殆どだった。本を読んだりテーブルに顔を伏せて眠っている者が多い。注文もコーヒーか紅茶にトーストが圧倒的である。

午後になると、付近のビルから抜け出てきたサラリーマンか、商談や打合わせに額を寄せている中年男が、席の八割を占めている。クリームソーダーやチョコレートパッフェの注文が、ぐんと増える時間だった。

夕方以後はアベック客の天下だった。シートに寄り添ったシルエットが、コーヒーと洋菓子を前に、閉店時間近くまで動かない。ウエイトレスの仕草が何となく粗暴になるのも、この頃である。

『十字屋』の特色は、各テーブルに全部、電話機が備えつけてあることだった。入口のすぐ左側に、ガラスで仕切られた電話交換室があって、交換手が二人いる。客から指定された番号のダイヤルを

回し、外線に繋ぐことと、外からかかってくる電話を取り次いで、それを指名の客のテーブルに繋ぐことが仕事である。

外からかかってきた電話を繋ぐ場合には、放送員がマイクで指定の客の名を呼出す。その客が店にいれば、何番テーブルにいると電話で知らせてくるわけである。

木原辰一はその放送員だった。午前十時から夜八時まで、交換室の中に坐っている。ガラス越しに客全体を見渡しながら、幾百回となく「お呼出し申し上げます。〇〇様、いらっしゃいましたら、お電話をお取り下さい」という言葉を繰返している。

なぜ女の放送員を使わないのか、理由は知られていない。多分、四十人からのウエイトレスが店の中を泳ぐように歩き回っているから、放送ぐらいは男の声で、という一種の彩りのつもりなのだろう。

木原辰一の声は、確かに魅力的だった。美声というのではなく、通りのいい声とでも言うべきだろうか。二十八歳という年齢にしては落ち着いた、艶のある低音だった。

一見のんびりしていて、楽のような仕事に思えるが、実際は大変な神経労働である。閉店時間がくると、もう口をきくのも億劫になる。マイクが小憎らしい悪童のように見え、時には蹴倒してやりたい衝動に駆られた。

放送装置の電源を切って、木原は交換室を出る。とにかく今日も、放送に関しては一つも失敗がなかった——という安堵感が、一時に溢れ出た疲労とまじり合う。

急に重くなった足を運んで、店の中を突っ切る。客のいなくなった店内は、荒廃した倉庫のように殺風景に見えた。手拭いをかぶった数人の掃除のおばさん達が、もう端から埃りをたて始めていた。

奥のドアを開くと、薄暗い廊下だった。突当りは非常口で、右側の部屋が従業員更衣室になっている。

従業員更衣室は、カーテンで二つに仕切られている。男子用と女子用だった。男子従業員は少ないので、更衣室も静かだが、カーテンの向こう側は、女学生のクラス会のように賑やかだった。饒舌、嬌声、それに笑い声が何の統制もなく、幾重にも渦巻いている。水色のユニホームを私服に着換え終るまで、彼女達の口は動き続ける。

馴れてしまえば何ともないが、最初のうち男達は更衣室へ入ると、圧倒されたようにムッツリと黙り込んでしまう。聞こえてくる彼女達の華やかな声が、着換えの情景を手にとるように想像させるのだ。若々しい裸像の体臭まで漂ってくるような気がして、頭の中が熱っぽくなる。

木原はもう完全に不感症になっている。女の声だと、特に意識もしなかった。疲れきった神経には、

（やかましい！）

としか響かないのである。

手早くネクタイをしめなおし、スリーシーズンコートを肩にひっかけると、木原はさっさと更衣

室を出ようとした。

だが、彼の手がノブに触れる前に、ドアは外から開かれた。薄暗い廊下に、白い顔が夕顔のように浮き上った。

「玲子ちゃんか……」

木原の表情が、ほんの少し柔いだ。

長峯玲子は既に着換えをすませていた。白いミンクシールのオーバーで、黒のストールを無造作に首に巻いている。手にはボストンバッグをさげていた。

「挨拶に来たんです……」

玲子は小声で言った。

「今日でお店を辞めました」

身体も小柄だが、顔立ちもチンマリと整って愛らしい感じだった。目に翳があって、どことなく寂しげな顔つきだが、今夜の玲子は特に孤独な眼差しをしていた。

「やっぱり……」

木原は目で頷いた。噂は九分通り信じていたが、玲子の口からはっきりそうと聞かされると、木原の胸は冷たくなった。

「で、結婚するの？」

「ええ……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「いつ？」
「式は五日後です」
「今から考えなおす意志は全くないかな」
玲子は視線をそらして、一瞬の間をおいてから答えた。
「ありません……」
「そうか……」
木原の期待はあっさりと裏切られた。彼の脳裏に、あの金丸章治の角張った顔が浮かんだ。あんな野獣のような男に、玲子の繊細な身体が自由にされるという想像図は、木原にとってやりきれないものだった。
「少しの時間でいい。一緒に歩いてみないか？」
「ええ……」
玲子は素直に、誘いに応じた。玲子にしても、木原の気持は分かっているはずだった。具体的な愛情の表現はしてなかったが、二カ月前からこの『十字屋』のウエイトレスになった玲子に、何かにつけて気を配って来た木原である。
それでも木原には、玲子が自分のものになるという期待は、最初からなかった。彼自身、あまり恵まれた環境にはなかった。玲子との結婚生活が必ずしも幸福に行くという自信もない。だから、やがては玲子が自分以外の男のものになるのを傍観しなければならないのだ、という覚悟をしてい

た。木原の恋には、結実を諦めてという前提があったのかも知れない。
しかし、それも相手の男によりけりである。金丸章治が玲子の対象になるとは夢にも思わなかったし、それでは木原も釈然としなかった。
「僕は君の気持が理解できない」
店を出て、土橋の方へ足を向けながら木原は言った。都電の通りは、ビル街のせいか、もうすっかり暗くなっていた。振り返ると、京橋あたりに灯の瞬きがあったが、それも靄がかった闇に、赤茶けて見えた。
「なぜ、あんな男と結婚する気になったのだろう」
木原の声は虚ろだった。
二十二歳のまだ少女めいた匂いのする玲子と、汚濁の世間を渡りつくしたというような金丸が夫婦になる。木原は、玲子への憧憬に似た好意を踏みにじられたような気がしてならない。
「君、あの金丸章治という男について、詳しく知っているのか？」
「知ってます」
玲子は抑揚のない声で答えた。
金丸章治は『金丸組』という土建会社を持っている。本社が『十字屋』の筋向かいにあるところから、金丸はいつの間にか『十字屋』の常連になっていた。
金丸は顔も身体つきも角張っている。精力的な艶のある顔ではないが、色が健康そうに浅黒かっ

た。目つきはあまりいいとは言えなかったが、その熱っぽい鋭さが人を威嚇して、土建屋らしい貫禄になっていた。それは、たたきあげられた男としての年輪かも知れなかった。年齢は五十と自称している。だが、髪の毛は一摑みほども残っていなかった。

毎日の常連には、自然にウエイトレスも気安く口をきくようになる。勿論、ウエイトレスが客と同席することや、用件以外の雑談を交すことは禁じられている。しかし、短い間の立話や、店の外で会う約束を交すぐらいだったら、支配人の目には触れないのだ。

金丸とも、冗談を言い合うくらいに親しくなったウエイトレスが数人はいた。玲子もその一人だった。玲子が金丸の膝の上にコーヒーをこぼしたことから、二人はうちとけて話し合うようになったと聞いている。

「君、あの金丸という男が好きなのか？」

「まさか……」

心外だと言わんばかりに、玲子は顔をしかめた。

「じゃあ、どうして彼と結婚するんだ？」

「結婚って、愛情だけじゃないでしょう」

「すると、金か？　社長夫人の座が目的で結婚するのか？」

木原は足をとめた。そんなふうには思いたくなかったし、玲子をそういう女と見るのは苦痛だった。それだけに、木原の語調は激しくなった。そんな見方をする自分を、叱りつけているようだっ

た。

近づいてきたパトカーが、二人の前だけを徐行したが、すぐ走り去った。

玲子は目を伏せた。そして他人事のように呟いた。

「それもあるかも知れないわ……」

「たとえそうだとしても、よりによって、あんな男と——」

「だって、金丸さんはあたしと正式に結婚するんですもの。あたしだって、二号さんや同棲生活なら、お金で取引きする気にはならないわ」

「そりゃあ結婚は結構だ。女には妻の座が必要だし、唯一の逃げ道は結婚さ。しかしね、慎重に考えるだけの価値があるものだよ」

「慎重に考えたけど……？」

玲子の白い顔が斜めにかしいだ。不安も疑惑も、その表情にはなかった。意を決しきった女の顔だった。

「だけどね、常識的に考えて——」

木原は再び歩きだした。

「君と金丸との結婚は、一カ月ぐらいの間にまとまってしまったことだろう。これが慎重だったと言えるだろうか？」

「でも、そういう例は珍しいことではないと思うわ」

「そうか。じゃあ言おう。ぼくにはね、どうも納得できない矛盾点が二点ばかりあるんだよ。この二点をどう解釈すべきか、それがはっきりしないうちは、君の結婚に対する不安……いや、警戒心は消えそうもないんだ」

国電のガード下だった。通過する電車の轟音が、長く尾を引いて、やがて消えた。それを待って、木原は続けた。

「第一点は、なぜ金丸は急に君と結婚する気になったか。そして、それを急いで実行する必然性は何かということだ」

「金丸さんは真剣なんだと思います。結婚を申し込んでからも、あの人は一度もあたしをどこかへ誘う素振りは見せなかったわ。単なる女への興味なら、結婚を口にするのと同時に温泉マークへでも連れこもうとするのが、男の人のやり方じゃないかしら」

玲子は殊更、ヒールの音を高めた。照れ隠しに、そんなことをやっている感じだった。

「そこだがね、逆に言えば、君を本当に好きだったら、食事ぐらいに誘うのが当然じゃないかな。それが自然な男の欲求だよ。それを金丸は、結婚を申し込んだだけで、それ以上の行動に出ない……」

木原はそこに、何か作為めいたものを感ずるのだ。金丸は、いわば自然の法則を無視している。金丸はどう見ても、高潔な人格者とは思えない。すると、彼は意識して玲子に対する欲求を抑えているのか、玲子に全然愛着を感じていないのか、そのどちらかということになる。

では、なぜ玲子と結婚するのだろうか。金丸は、何か別の目的の為に玲子と結婚する気なのかも知れない、と木原は思った。

「金丸は確か、十年以上前に奥さんを亡くして、それ以来ずっと独身で通して来たんだろう？」

「ええ。仕事も忙しいし、とても再婚なんて考えているヒマがなかったって……」

「その金丸が、俄かに結婚を急ぎ始めたのはどういうわけだろ」

「齢のせいでしょう。きっと淋しくなったのだわ」

「それだけの理由で、まるで別人のように結婚を急ぎ始めたってわけかい？　十年以上の独身生活を平然と続けてきた男が、突如として結婚しようと遮二無二はやる。変だ……」

木原の胸で不安が凝固した。

最初のうちは、感情的に金丸と玲子の結婚を嫌悪して、玲子に思いとどまるよう説得するつもりだった。だが、こうして話合っているうちに、全く別の不安が兆してきたのである。

それは感情でもなかった。結婚する玲子に危険がともなうのではないか、という不安だった。

「第二点目の矛盾っていうのは？」

玲子が訊いた。屈託のない顔つきだった。明るくはないが、特に木原の言葉にこだわって眉をひそめているという表情でもなかった。どうやら木原の心配は、玲子には通じないようだった。

「金丸はね、去年の暮れに、店の女の子にやはり結婚を申し込んでいるんだ。その女の子は、まるで相手にしなかったらしいがね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton